

混沌とする世界の中での日本の役割

～能にみる『日本のこころ』とは～

金春（こんばる）流能楽師

山井 綱雄

2019 年は、日本にとって平成が終わり新しい『令和』の時代が始まる大きな転換の年です。そして、世界が最も注目する世界最大の祭典・東京オリンピック・パラリンピックが 2020 年に、更に 2025 年には大阪に万国博覧会（万博）がやってきます。

18 世紀ヨーロッパでの産業革命以来、人類は『物が豊かになること』『お金が沢山儲かること』『イコール』『幸福である』というロジックの元に、主に欧米が世界を牽引する形で突き進んできました。目に見えるもの、ロジカルに計れることだけを信じるという価値観、日本もそうしたロジックの中で、戦後の復興を遂げることが出来ました。

しかしながら、価値観の衝突、原理主義の台頭、自国第一主義のリーダーの出現、全員に 1 番になることを目指させる教育、その反動で 1 番になれず脱落していく多くの人々を生み出す世相、それらの人々を救い上げる手段の喪失など、その歪みもはや止めどなく世界、特に欧米社会に蔓延する事態となりました。

私は今、欧米的な価値観・西洋文明がひとつの限界を迎えているのではないかと感じています。世界が迷走し、先が見えないトンネルで暗中摸索する中で、世界は、日本をはじめとするアジア・東洋に注目し始めてきたのだと実感します。これは平成 26 年に文化庁文化交流使として世界を廻り感じたことでもあり、2020 年オリンピック・パラリンピックが東京、2025 年の万博が大阪での開催決定となったことは、そのひとつの象徴なのではないでしょうか。

そして、能楽（のうがく：「能」と「狂言」を総称した名称）をはじめとする日本古来の文化には、現在世界が直面する諸問題に対して、突破口となるヒントが隠されているように思うのです。

例えば、能楽には、神様も仏様も一緒に登場します。また、漁師と天女の和解を描く能「羽衣」では、『異なる』ということに目くじらを立てず、日本人の『おおらかさ』を描きます。自然と共に生き、『共存共栄』する姿を描くのです。あるいはまた、能楽に登場する「鬼」は、絶対悪ではなく、誰もが共感できる『敗者の悲哀』を持ち、「神」と「鬼」は表裏一体なのだと言います。能楽には、深い人間ドラマが描かれています。

地謡（じうたい：コーラス）や囃子（はやし：笛・小鼓・大鼓・太鼓）が奏でる『間』の世界では、シンプルな音の中に深い世界を創り出し、舞台上に「禅」や「茶道」にも通ずる『無』という世界を構築します。能楽は、日常の中に「非日常」の世界を創り、『マインドフルネス』な『癒し』の空間を創り、観ている人達に『心のビタミン』を与えてくれるのです。

能楽公演では、リハーサルを行ったとしても一度またはゼロで本番を迎えます。能楽師は、連続公演をしない一度きりの本番の舞台の上で、指揮者も無くぶつかり合います。『あうんの呼吸』『忖度』等と表現されるように、目に見えない心を押し量り、目に見えないものの中に大きな価値を見出す日本人らしさがあらわれています。

また、能楽は『余白』の芸術であり、簡素な舞台装置の中で、現代人が失いつつある「想像力」を喚起させ、自由に無限に世界を描きだします。丁度、写真と見紛う写実主義の西洋絵画と、日本の水墨画や書との対比に似ていると感じます。

奈良・春日大社に於いて約 900 年前より『天下泰平』を祈念してきた我が能楽金春流宗家、その初代は大  
陸からの渡来人です。日本人（大和人）ではありません。これは、能楽最古の流派であり 1400 年の歴史を背  
負う金春流宗家の存在自体が、この現代においてとてもグローバルであるといえます。

能楽は、シルクロードを経て大陸からもたらされた宗教・文化・芸能と、日本固有の宗教・文化・芸能を、世界で  
も稀有な独自の感性と感覚を持つ日本人が、ミックスし、練り上げ磨き上げた『ハイブリッドな芸能』です。様々な異  
なる価値観が共存する、様々な要素を併せ持った、古くて新しい芸能なのです。ルーツが、決して日本固有のもの  
だけではないそれ故に、能楽は世界でも稀有な価値観と芸術性を併せ持った文化となったのです。

この二十一世紀は、日本がリードする形でアジアの人々と連携し、東洋・アジアから新しい価値観が生まれ、世  
界中、特に西洋文化圏の人々にその価値観が広まり、能楽を始めとする日本の伝統文化芸能のなかに古来より  
伝来してきた『こころ』が、正にその根幹となり得ると信じます。

そしてその『こころ』とは、決して自分達が 1 番であると決めつけ他を排斥するものではなく、『自国にプライドを持ち、  
自国について語れ、且つ他国をリスペクトすることが出来るこころ』です。

今日の日本が忘れかけてしまった『日本のこころ』が今一度広まることで、日本が変わり、世界が変わる。

今後 100 年の日本や世界の歴史の歩みの中で、東京オリンピック・大阪万博前後のこの十数年間は、そのきっ  
かけとして大変大きな意味を持つと、私は思っています。

能楽の存在理由はまさにそれに寄与することであり、能楽を広めることが現代を生きる能楽師である私の使命であ  
ると、確信しています。